

4 事業創出活動

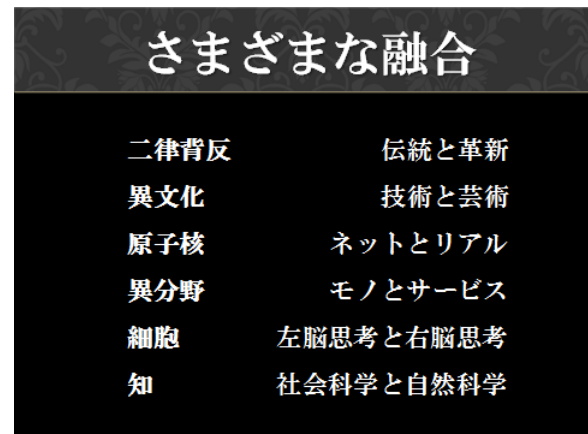
□ 産業振興分野

「新融合イン滋賀」研究会

1. 「新融合イン滋賀」研究会のねらい

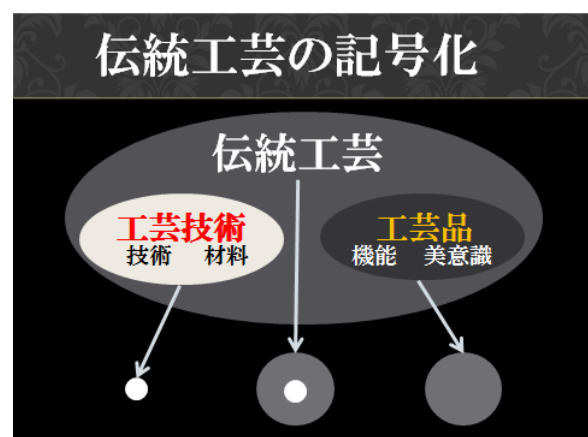
地場の伝統工芸産業の活性化に向けて、本年度に「新融合イン滋賀」研究会を立ち上げた。伝統産業の活性化へ焦点を絞った理由は、1) 経済的価値のほかに日本のプレゼンスを支える文化的価値を包含する点、2) 確固たる技術があり、それを生かした新たな社会的価値づくりが希求されている点、3) 市場環境変化による危機感を強く持ち、迅速な開発展開へのスタートが早い点、4) わかり易い事例であり、ここで得られた方法論を他展開しやすい点、を考慮した。これまでも地場の伝統工芸産業の活性化をねらいとして、形や色のデザイン先導型の新商品開発活動がいくつか進められているが、本研究会ではそれらの活動とは異なり、新コンセプト創出を最優先し、地場の伝統工芸産業の異分野融合によるコンセプト創出と試作開発を進めることをねらいとした。

また、「融合」という言葉には、伝統と革新の融合、技術と芸術の融合、ネットとリアル融合、モノとサービスの融合、左脳思考と右脳思考の融合など、さまざまな融合があり、融合によって何か新しいものが生まれることを予感させる響きを持つ。異分野融合など様々な分野で試みられているにもかかわらず、その方法論が見当たらない。本研究会において融合発想の方法論についても研究を進める。



2. 「新融合イン滋賀」研究会の進め方(方法論)

本研究会では、伝統工芸を工芸技術(技術、材料)と伝統工芸品(形、機能、美意識)に分離し、それらの要素を新しい価値観に基づいて融合させることで新しい発想商品を展開したいと考えた。これらのアイデア創出のプロセスは別途報告する予定であるが、融合発想に4種類のタイプがあるとの仮説をベースに、アイデア出しで欠落した部分があることを再認識することでアイデア出しを促進させる方法を試みた。まさに「新融合イン滋賀」研究会は融合発想を試行実験する実践の場でもある。



3. 「新融合イン滋賀」研究会の発足

「新融合イン滋賀」研究会の発足に向けて、昨年度から繊維、仏壇、陶器、扇骨など、滋賀の代表的な伝統工芸産業の現場視察を行い、伝統工芸産業の活性化に取り組んでいる若手キーマンの一部の方々を中心に訪問ヒアリングを進めてきた。これら伝統工芸産業の活性化に取り組んでいる若手キーマンの方々に加えて、自治体や公設試

験機関で地場伝統産業の振興に係わる方々、滋賀大学からはマーケティング、発想法をベースにした新商品企画、経営コンサルティング、デザイン教育に携わるメンバーから構成される「新融合イン滋賀」研究会を発足させた。



4. 「新融合イン滋賀」研究会の活動

本年度の活動として、3回のアイデア会議を実施した。特に第1回目のアイデア会議が融合による新コンセプト創出の重要な場となるため、それに向けて3回の企画会議を開催し、アイデア創出を強化するための構成メンバーの人选、会議の運営、場所の選定を討議した。第1回目のアイデア会議で約50の素アイデアが生まれ、第2回目のアイデア会議ではこれらのアイデアの深堀と補足課題について討議を行った。その結果、試作開発して行く出発点となるテーマとして、8つの融合アイデアを抽出し、推進担当者を決定した。第3回目のアイデア会議では、「和紙とエレクトロニクスの融合」、「信楽焼と漆の融合」など、一部の試作検討がスタートしたテーマについて、コンセプトのブラッシュアップや方向修正を議論した。

新融合の開発テーマ

- 「信楽焼」と「漆」の新融合
- 「和紙」と「エレクトロニクス」の新融合
- 「和紙」と「信楽焼」の新融合
- 「竹細工」と「睡眠科学」の新融合
- 「繊維」と「漆」の新融合
- 「仏壇」と「扇骨」と「和紙」の新融合
- 「伝統的工芸品」の新融合
- 「伝統工芸つかわないもの」の新融合

5. 今後の進め方

「新融合イン滋賀」研究会における新コンセプトの創出アプローチの全体像は、試作開発を通じてのコンセプトのブラッシュアップや方向修正を包含するものであり、現時点では一部の試作検討がスタートした段階であり、報告するには時期尚早である。融合発想法ならびにアイデア創出プロセスの詳細については、次号で報告する予定である。

(文責 特任教授 山本 卓)